ドイツで開催のブルーノ・タウト没後80年を記念する展示会

お茶の水女子大学名誉教授　**田中 辰明**

はじめに

桂離宮を始め、日本の文化を世界に紹介した建築家ブルーノ・タウトは1938年12月24日にイスタンブールで死去した。2018年は没後80年にあたる。これを記念してドイツでは展示会を始めいろいろの行事が行われた。

タウトが来日するまで住んでいたタウト設計の旧宅はドイツのベルリン郊外ダーレビッツにある。このダーレビッツの隣町ブランケンフェルデで大規模な展示会が開かれた。

1．ブランケンフェルデにおけるブルーノ・タウトの没後80年を記念する展覧会

会場は町民会館アルテアウラ（Alte Aula）であった（写真1）。

筆者はこの展示会にタウトが日本滞在中の業績などの提供のお手伝いをした関係で招かれ、2018年12月14日に会場を訪問した。オルトヴィン・バイアー町長らの歓迎を受けた（写真2）。会場にはブルーノ・タウトが設計し、唯一日本に残る熱海の旧日向別邸の写真が詳しく展示されていた。また高崎少林山だるま寺「洗心亭」での生活、洗心亭でタウトが描いた水彩画、など多くの展示がなされていた（写真3）。このパネルのタイトルは「1933年から1936年にわたるブルーノ・タウトの日本への亡命」というタイトルが付けられていた。また高崎での生活や熱海市の旧日向別邸の姿を纏めたビデオも上映され来場者に感動を与えた。会場の風景を写真4に示す。また著者によるブルーノ・タウトに関する著作もガラスケースに収められて陳列されていた（写真5、6）。

写真1　ブルーノ・タウト没後80年の記念展示会が開かれたブランケンフェルデの町民文化会館 Alte Aula（上：写真2　挨拶を頂いたオルトヴィン・バイアー町長）

写真3　タウト日本滞在中に関する展示パネル

写真4　展示会場

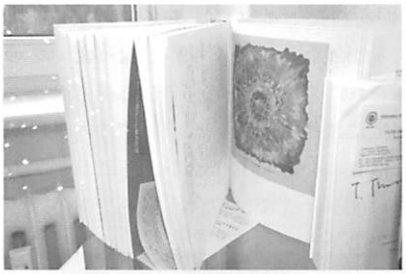

写真５　筆者の著作「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」の展示

写真６　筆者の著作「ブルーノ・タウト 日本美を再発見した建築家」の展示

会場にはブルーノ・タウトのお孫さんクリスチーネ・シリーさん（ドイツの環境問題を政策としてきた「緑の党」を立ち上げ後にドイツ社会党（SPD）に移り社会党政権時代（1998～2005年）に内務大臣を５年間にわたり務めたオットー・シリーと結婚したが、事情により後に離婚している）も訪問されていた（写真７）。オットー・シリーとクリスチーネさんの間にはジェニー・シリーというドイツで有名な女優となった娘がおり、ブルーノ・タウトのひ孫にあたる。1981年に「ドンキホーテの子供達」でデビュー、2010年には「犯罪地―ヒッチコックとヴェルニッケ」で主演女優を務めた。この女優さんも来場しておられた。

写真７　ブルーノ・タウトの孫娘クリスチーネ・シリーさんと筆者

ブルーノ・タウト（1880～1938）は東プロシアのケーニヒスベルク（現在ロシア領カリニングラード）に生を受けた。マクデブルグの役人として建設活動に尽力した。当時「アルプス建築」という表現主義の画集を発表し、ドイツ表現主義の旗頭となった。1920年代にベルリンに労働者の健康を考えた集合住宅を１万２千戸建設し、社会主義の建築家として名を馳せた。

これらの内４つの住宅団地（ジードルングと呼ぶ）が、2008年にユネスコ世界文化遺産に登録されている。この４つのジードルングは田園都市ファルケンベルク（1913～1916）、シラー公園のジードルング（1924～1930）、ブリッツの馬蹄形住宅（1925～1930）（写真８）、カール・レギエンの住宅都市（1928～1930）の４件でいずれもベルリン市内にある。しかし、ブルーノ・タウトはモスクワで活動したことを理由に、台頭してきたナチスに睨まれ、1933年に憧れていた日本へ亡命のようなかたちでやって来る。バウハウスの初代校長ヴァルター・グロピウス、３代目校長ミース・ファン・デル・ローエは米国へ亡命し成功した。

タウトは日本では思うような建築活動を行えず「建築家の休日」と自嘲し、高崎の少林山だるま寺の庵「洗心亭」（写真９）にこもった。だるま寺では当時の住職広瀬大蟲一家の温かいもてなしを受けた。洗心亭の傍らにはタウトが揮ごうした「我日本文化を愛す“Ich liebe die japanische Kultur”」という石碑が建っているがこの写真も展示され

写真８　ブリッツの馬蹄形住宅（ユネスコ世界文化遺産）

写真９　高崎の少林山だるま寺洗心亭

写真10　洗心亭の傍らに建つタウトの石碑

ていた(写真10)。タウトはだるま寺において日本文化を紹介する著作活動に専念した。なかでも桂離宮や伊勢神宮を称賛した「日本美の再発見」は有名である。

日本に現存するタウト設計の建築物は熱海市の旧日向別邸だけである。国立競技場の設計者である隈研吾氏は現在日本を代表する建築家として活躍している。氏が「おしゃべりな銀座、銀座百点編」に「ブルーノ・タウトの小箱」というエッセイを寄稿している。ここに「日向邸から僕はいろいろなことを学んだ。その隣に僕が設計したゲストハウスには「水／ガラス」という名前を付けた。海と人をひとつにするために、タウトの本を読みあさり、彼のディテールを研究した。それほど日向邸は素晴らしかった。タウトの人生の蓄積、そのディテールの隅々に込められていた。」と記している。そして「氏が建築家になったのはブルーノ・タウトのお陰である」と記している。

タウトが日本で建築の仕事ができず悩んでいた1936年にトルコのイスタンブール芸術アカデミーから教授の声がかかり、トルコへ移住した。トルコのアタチュルク大統領に信認を得多くの建築設計を行ったが、しかし激務の為病を得、1938年イスタブールで客死した。

2．ダーレビッツに残る ブルーノ・タウト旧宅の訪問

筆者はタウトの展覧会を参観のあと隣町ダーレビッツに建つタウト設計の旧宅を訪問した。冬至も近いその時期日の暮れも早い。夕闇に建つチャコールグレーのケーキを4等分した形の住宅でガラスブロック越に室内の明かりが漏れていた(写真11)。現在は画家で音楽家でもあるハンナ・ディップナーさんが住んでおられる。久しぶりの再会で、筆者の訪問を喜んで頂いた。タウトは

写真 11　ダーレビッツのブルーノ・タウト旧宅外観

1914年ケルンで開かれたドイツヴェルクブンドの展覧会に「ガラスの家」を出展しこれが出世作となった。このガラスの家で使用されたガラスブロックを彷彿させるブロックがタウト旧宅に使用されている。旧宅の内部は原色を用い日本人にはきつい感じもするが、冬に日の出も遅く、夕暮れも早い北ドイツでは似合う配色である。こ

写真 12　タウト旧宅２階寝室

写真 13　タウト旧宅２階ベランダへの出口

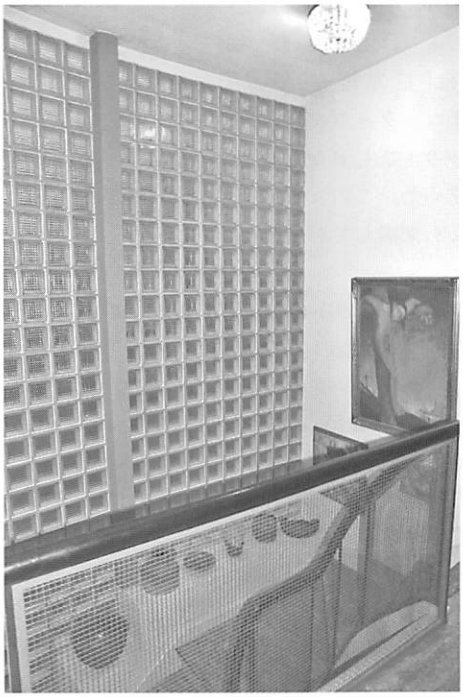

写真 14　タウト旧宅階段と外壁のガラスブロック

写真 15　タウト旧宅２階のアトリエ
（ディップナー夫人の仕事場）

写真 16　タウト旧宅２階の階段

写真 17　タウト旧宅１階の書斎

写真 18　タウト旧宅１階居間

写真 19　タウト旧宅ヴェランダ

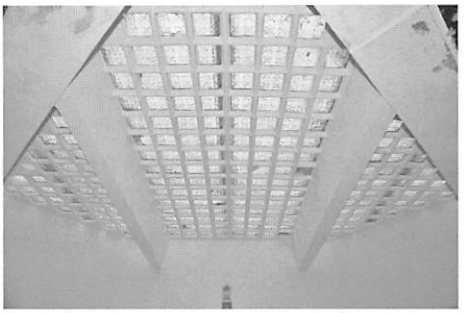

写真 20　タウト旧宅ヴェランダ上の明り取りガラスブロック

のような色彩を使用しないと冬のドイツの生活では人々の心を陰鬱なものにしてしまうであろう。タウトは室内に彩色しているが、塗装職人が引退後精神障害を起こすことを認めていた。現在でいうVOC汚染である。そこで無機の塗料を使用するようにしていた。現在この住宅はタウト研究家で建築家であるヴィンフリード・ブレンネ(Winfried Brenne)氏により修復作業が行われた。ここでも忠実に無機塗料が採用されている。いくつかのタウト旧宅の室内写真を写真12から20に示す。

日が暮れると外気温度は急激に下がってきた。ディップナー夫人に「今後ともお元気に！」と別れを告げ、次の訪問予定先である展覧会の企画者であったヴェラ・ザイデルさんのご自宅をブランケンフェルデに訪問した。

3．タウト研究家ヴェラ・ザイデルさんを訪問

筆者がザイデルさんにお会いしたのは丁度10年昔の2008年であった。当時84歳であったが、非常にしっかりした方であった。現在は94歳であるが自宅で車いすを使用し一人で生活をされている。ここには前述のブルーノ・タウトのお孫さん、クリスチーネ・シリーさん、ひ孫で女優のジェニー・シリーさんも招かれた。ザイデルさんはご高齢であるので、ほんの少しの訪問という約束であったが、一旦上がり込むとなかなか放して頂けず、２時間ほどの滞在になってしまった(写真21)。ザイデルさんはもともとダーレビッツに住み、戦後荒れて

いたタウトの旧宅付近をよく散歩したそうである。誰の家か分からなかったが、大変特徴のある家であるとして、興味を持ったそうである。自分で住みたいと思ったが、そうはいかず、旧東ドイツ時代に東ドイツ政府が売却に出したそうである。しかし子供が３人以上の家族に売却するという条件が付いたそうである。そこでライプチヒなどでバイオリン演奏をしていたディプナー夫妻が名乗りを上げ、音楽家として収入もあったので、これを購入し、現在は夫人が住んで住宅の管理をしているとの事であった。それ以来ザイデルさんとディップナーさんは懇意になり訪問しあったそうである。途中修復工事も行われたが、これにはドイツの文化財を保護する財団が資金を出したそうである。その修復計画を行った建築家が前記のヴィンフリード・ブレンネさんである。ザイデルさんはタウトの日記で、ダーレビッツに残してきた子供達と文通を行った事が書いてあるが、これは子供たちが同じ家に住んでいたのではないとの事であった。父親のブルーノ・タウトがナチスから狙われていたので、家族もダーレビッツ市内ではあったが分散して住み身の安全を計っていたとの事であった。また現在のタウト旧宅は第２住宅で道を隔てた向かい側に第一住宅があり、現存しているとの事であった。ブルーノ・タウトと伴侶エリカは第一住宅に住みながら第２住宅(現在のタウト旧宅)の設計工事の成り行きを見守っていたとの事であった。タウトがここに住んだのはタウトと共に来日したエリカの母親がダーレビッツに住んでいたのが理由であるとの事であった。タウトの孫娘であるクリスチーネ・シリーさんは大政治家の夫人であっただけに立派な方である。しかしタウトについては「芸術家、建築家、思想家としては立派な人であるが、家庭人としてはひどい人であった、自分の祖母のヘドヴィックはドイツにおいておかれ、母親のエリザベートも大変に苦労した。」と話した。それを聞いた娘の女優ジェニー・シリーさんが涙ぐむという事もあった。筆者もベルリンの宿に戻らなくてはならず、そう長居もできなかった。

写真 21　ブルーノ・タウトについて語るヴェラ・ザイデルさん(右)、孫娘のクリスチーネ・シリーさん(中央)、ひ孫のジェリー・シリーさん(左)

ザイデルさんに別れを告げ、深々と冷える夜道をブランケンフェルデの駅に歩いた。そして電車でベルリンへ戻った。大変有意義な一日を過ごした気分になった。

4．ブルーノ・タウト設計の“森のジードルング”オンケルトムズヒュッテ訪問

今回のドイツ訪問は厳寒期であまり建築物を訪ね歩くのには適していなかった。しかしどうしてももう一度訪問したいジードルングがあった。それは“森のジードルング”オンケルトムズヒュッテ(1926～1931年建設)であった。今から46年前の1972年に筆者の恩師である武基雄先生が筆者の留学先のベルリンを訪ねて下さったことがあった。その時に武先生の依頼によりご案内したのが“森のジードルング”オンケルトムズヒュッテであった。これが筆者のブルーノ・タウト研究のきっかけとなった。日本へ帰国する日の12月18日午前中にこのジードルングを訪問した。総住居数は1915戸である。都心から郊外の緑の森に向けて1929年に地下鉄が建設された。オンケルトムズヒュッテ駅の電車線路を挟み両側にジードルングが作られた。ジードルング内には商店は作られず、地下鉄駅のホームに沿って商店街が作られ、ジードルング住民の便宜を図った。駅中商店の草分けである(写真22)。集合住宅は最近塗装が再度施されたのか、極めて美しかった(写真23)。とても1926年に建設された住宅とは思えない。隣棟間隔を十分にとり、樹木を植え、採光にも配慮し、勤労者の為に健康な住宅団地を造ろうとしたタウトの精神がここに生きている。ジードルングの各家庭では近づくクイスマスを祝うようにいろいろの飾り付けが行われていた(写真24)。今から46年昔の1972年に武先生に依頼されご案内した集合住宅も訪問した(写真25)。武先生はこの住宅をご覧になると「オーッ」と奇声を発せられ、暫く動くことがなかった。どうされたのか、心配になったが当時筆者から見ると武先生は非常に偉い方で「どうされたのですか？」とも伺えなかった。武先生は帰国後病を得、筆者が翌年帰国してからも「何故あの住宅をご覧になり、奇声を発せられたのか？」と伺うことは出来なかった。恐らくタウトが日本滞在中に行った授業か講演の材料であったのでないかと勝手に想像している。このジードルングには住民がタウトに感謝して建てた顕彰碑がある。ジードルングの各

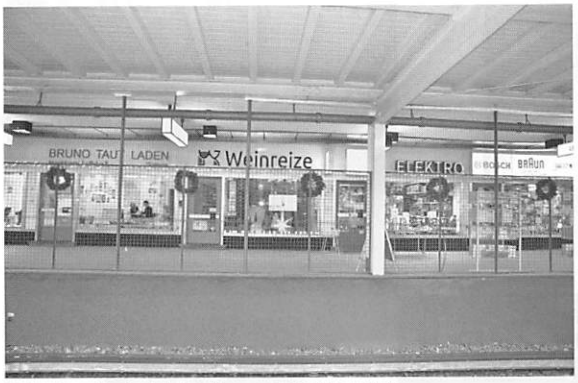

写真 22　オンケルトムズヒュッテの駅中商店街

写真 23　オンケルトムズヒュッテの集合住宅

写真 24　近づくクリスマスを祝うオンケルトムズヒュッテの集合住宅

写真 25　1972 年に恩師武基雄先生をご案内した集合住宅

集合住宅を写真撮影しながら見学していてはいくら時間があっても足りない。一方で帰国便の出発時間は迫っていた。最後にタウトの顕彰碑を訪問して後髪を引かれる思いで、地下鉄に乗車しジードルングを去った。

おわりに

今回の旅行ではブルーノ・タウトが取り持つご縁で非常に多くの素晴らしい方々と再会を果たし、交流を持つことができた。12月は寒い時期でもありドイツを旅行するには適さない時期である。それにも拘わらず、訪問目的をほぼ完全に達して無事に帰国することができたのも関係各位のご配慮によるものと感謝している。

写真 26　オンケルトムズヒュッテのジードルングにあるブルーノ・タウト顕彰碑と筆者

〈参考文献〉
1．田中辰明、「ブルーノ・タウト、日本美を再発見した建築家」中公新書2169
2．田中辰明、「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
3．おしゃべりな銀座、銀座百点編、扶桑社
4．田中辰明「ブルーノ・タウトの業績と旧宅と保存事業」月刊建築仕上技術、2007年11月号
5．田中辰明「建築家マックス・タウトの業績と生涯」月刊建築仕上技術、2008年11月号
6．田中辰明「ユネスコ世界文化遺産：ベルリンのブルーノ・タウトにより設計された住宅団地」月刊建築仕上技術、2008年12月号
7．田中辰明「ブルーノ・タウト設計による円形住宅「チーズカバー」月刊建築仕上技術、2009年９月号
8．田中辰明「ブルーノ・タウト設計によるオンケルトムズヒュッテの住宅団地」月刊建築仕上技術、2009年３月号
9．田中辰明「ブルーノ・タウト設計によるブレンツラウアーベルク地区の集合住宅」月刊建築仕上技術、2009年７月号
10．田中辰明「ブルーノ・タウト設計によるベルリン市ヴァイセンゼー地区の集合住宅」月刊建築仕上技術、2009年８月号
11．田中辰明「ブルーノ・タウト設計によるベルリン市ノイケルン地区の集合住宅」月刊建築仕上技術、2009年９月号
12．田中辰明「ブルーノ・タウト設計による日本における唯一の建築物である旧日向別邸「熱海の家」」月刊建築仕上技術、2010年３月号
13．田中辰明「ブルーノ・タウトがベルリン郊外に設計した集合住宅」月刊建築仕上技術、2010年４月号
14．田中辰明「ブルーノ・タウトの作品群」月刊建築仕上技術、2011年２月号
15．田中辰明「ブルーノ・タウトと二人の伴侶」月刊建築仕上技術、2011年３月号
16．田中辰明「ブルーノ・タウトと色彩」月刊建築仕上技術、2011年４月号
17．田中辰明「ブルーノ・タウトが使用したドイツの無機塗料」月刊建築仕上技術、2011年５月号
18．田中辰明「ドイツ・トルコの外断熱最新動向とタウトの作品」月刊建築仕上技術、2011年12月号
19．田中辰明「ブルーノ・タウトの作品」月刊建築仕上技術、2014年３月号
20．田中辰明「ナチス好みの建築とナチスドイツに対する反省」月刊建築仕上技術、2014年11月号